

自ら学び 自ら鍛える  
**Team 北中**

令和2年度 学校報 第4号 令和2年6月10日  
発行責任者：瑞浪北中学校校長  
担 当 者：瑞浪北中学校教頭



<合言葉> クリエイティブ瑞浪北中 2nd year  
—学校の特長を確かなものにする年—

## こんな生徒の姿、うちだけかも

校 長

夏の日差しとともに、生徒がやってきました。2ヶ月ぶりに生徒がそろい、学校に活気が戻ってきました。やはり、生徒がいてこそこの学校です。教室に響く生徒たちの声、移動時間に廊下を歩き来する生徒たちの姿、そして、笑顔で交わす生徒たちのあいさつ……どれをとってみても、学校が蘇ってきた感触があります。

「親バカ」という言葉がありますが、今日は「校長バカ」と思われるかもしれないことを書こうと思います。久しぶりに見た北中生の姿の中に、校長として感動が生まれました。昨年度「主体性、主体性」と繰り返して言ってきましたが、それが確実に生徒たちの姿に表れてきています。それが大きな感動です。「ひょっとして、うち（の学校）だけかも……」「うちだけではないとしても、主体性を発揮できる生徒がいちばん多いのは北中ではないか……」などと、「校長バカ」的なことを考えてうれしさに浸っています。

左の写真は、6月第2週に発行された学級通信の一部です。二枚に共通しているのは、掃除の時間が設定されていなかった分散登校時に、自分の判断で教室の整理整とんに努めた生徒たちを掲載していることです。昨年度までは、主体性を発揮させようとする教師の働きかけがあり、その刺激を受けた生徒たちが動いている感がありました。

しかし、今年度は違います。主体性を大切にする昨年度の流れが、生徒たちに根付いています。言われなくても自分で判断して自分から行動に移すことができている。これこそが私の求めている姿であり、瑞浪北中ならではの武器になると言えるでしょう。

これは、3月に卒業した生徒たちの影響が大きいと私は思っています。開校一年目、主体性を身につけようと

前向きに取り組み、その種を後輩たちに確実に蒔いていきました。今年度になってその種が芽を出しました。長い休校期間がありましたが、じっと耐えて発芽したのです。いや、休校期間中はそれぞれの家庭で芽を出していたのかもしれませんが。今年度はその芽がどれくらい大きく成長し、どんな花を咲かせるか、今から楽しみです。

全国的なテストで平均点が上位に食い込んだり、部活動で優秀な成績を収めたりすることも校長としてうれしく思いますが、自分で判断して自分から行動に移せる生徒が育つことには違う感動があります。そういう生徒が多くなればなるほど、学校全体の主体性につながり、学力も運動能力も自然とついてくると私は信じています。

先ほど紹介した通信には、整理整とんや掃除に関する生徒の姿が中心に紹介されていました。今年度は特殊な状況下からのスタートです。昨年度と同じように取り組むことはできません。だからこそ、思考を柔軟にして、掃除や整理整とん以外にもどんどん主体性を発揮してほしいと願っています。

とりわけ、学習と地域貢献には、どのような主体性が発揮されるのでしょうか。感染防止のために、昨年度までのように質問タイムが実施できません。だからといって、わからないことをそのままにしておいてよいということにはなりません。生徒たちがどのようにどんな質問をしてくるのか楽しみです。

地域の行事が中止となり、ボランティアが激減します。したがって、新しい地域貢献の仕方を考える必要があります。「(コロナ、コロナで) 中学校は今どうなっているのだろう」と心配してくださっている地域に、生徒たちはどのような貢献ができるのか興味津々です。

「生徒たちがこんなにたくさんの主体的な姿を見せている中学校は、うちだけかも……。」

素直にそう思います。やはり「校長バカ」でしょうか。バカでも何でも、うれしいことは事実なのですからね。令和2年度は休校から始まりましたが、この休校が何か新しいものを生み出すような気がしています。

